

ポーランド初のアイヌ文化展

松本 照男

ワルシャワから南西 300キロのジョーリ Zory 市は、人口わずか6万の小都市ですが、1272 年に自治権を得た由緒ある街で、往時はバルト海からローマに至る琥珀街道の商業ルートとして栄えました。第二次大戦で街は破壊され、いまはわずかに中世の街の城壁の一部が残るだけの一地方都市です。

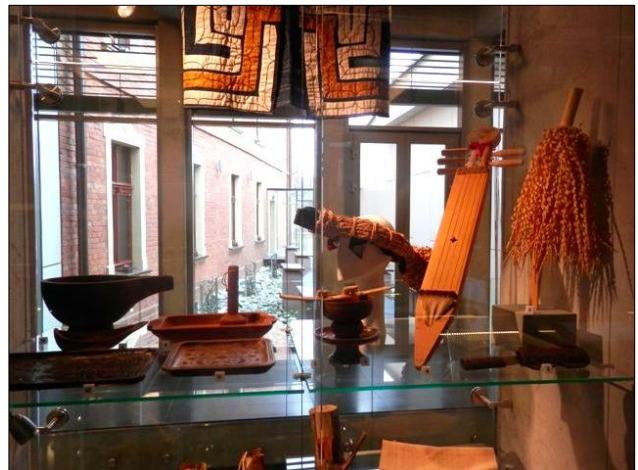
このジョーリの市立博物館 Muzeum Miejskie w Żorach のブハリック館長 Dr. Lucjan Buchalik は博物館増築の機会に『世界におけるポーランド人の活躍』という新たな展示を企画しました。展示は、三国分割時代(1795-1918)に故国を離れたり、帝政ロシアに抵抗してシベリア流刑になったりしたポーランド人たちの世界各地での研究活動とその国の文化に焦点をあてています。

そのような国の一つとして日本を考えたとき、館長はすぐにプロニスワフ・ピウスツキのアイヌ民族に関する研究業績を思い起こしたそうです。ただ、ポーランド各地の博物館にはアイヌ民族に関する文化財は皆無なので北海道に飛ぶことにして、一面識もない白老のアイヌ民族博物館にメールを送り協力をあおいだところ、その趣旨がいまひとつ理解できなかった野本正博館長から札幌在住の児玉忠征氏を通してワルシャワの松本に連絡がはいり、やっとジョーリ博物館の意図が了解されました。

2015 年6月ブハリックさんは北海道に飛来し、児玉さんと松本の二人三脚で接遇し、各地のアイヌ関連施設を訪れました。展示用には主に平取でアイヌ民具を購入し、二風谷アイヌ文化博物館の平村浩昭館長からは祭具、白老の野本館長からはアイヌ衣装をご寄贈いただき、札幌市役所のアイヌ施策課、北海道ポーランド文化協会等々からも破格の厚遇をいただき、地元メディアの取材もありました。その成果が実り、2016 年1月29日、ついに新展示のオープニングを迎えることができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さらに、アイヌ文化とプロニスワフの研究業績にいたく感銘を受けた館長は、2018 年春を目処に半年間の『アイヌ文化とプロニスワフ』特別展も企画しています。この3月4日には松本がジョーリ市のソーハ市長に面談して、市としてこの特別展に全面的な支援をお願いしました。この企画が正式に動き出せば、また北海道各地のアイヌ関連施設にご協力をお願いに伺うつもりです。その節はよろしくお願ひします。
(文と写真:まつもと てるお)

2016.1.29 ジョーリ市博物館新展示オープニング:
左は筆者、中央はブハリック館長
Photo: A.Zabka



2016.1.29 ジョーリ市博物館：アイヌ文化展示

2015.6 白老
左からブハリック館長、野本館長、松本夫妻、後ろはピウスツキ像



2015.6 二風谷
右から児玉氏、平村館長、5人目学芸員補 関根健司氏



2015.6 サッポロピリカタン:
右端は札幌市アイヌ施策課生野祐光課長

